
かごめかごめ

水樹裕

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

かごめかごめ

【Nコード】

N4990C

【作者名】

水樹裕

【あらすじ】

香織はある日、不思議な夢を見る。『かごめかごめ』は呪いの歌なんだ。だから歌った者は、呪われるんだ。 。 楽し気にそう言う子供の声。その声の正体は？

巻（前書き）

「夏ホラー2007」参加作品です。

2008.5.6

読みやすさを考慮して、企画規定だった前後編を8話分割に変更、若干修正しました。

かごめかごめ

巻

かごめかごめ
かこのなかのとりは
いついつでやる
よあけのばんに
つるとかめがすべった
うしろのしょうめん だあれ

歌だ。

果てのない、まるで底なし沼のような混沌とした暗闇の中で、樂しげな子供達の歌声が、どこからともなく聞こえてくる。

かごめ、かごめ、かこのなあかの、とおりいは。

低く高く響く、聞き覚えのある懐かしい旋律に、私は記憶の細い糸を辿った。

ああ、『かごめかごめ』の歌だ。

よく子供の頃、友達と一緒に神社で遊んだっけ。同じ年で一番の親友の新庄沙希。

稚園から大学までずっと一緒に、大人になった今も同じ職場に勤めるほど仲が良い。まるで姉妹のような、沙希。

そして、沙希の妹で六歳下の早苗ちゃんと、神社の神主の孫息子で私より二つ上の東悟。この四人で、放課後はいつも暗くなるまで遊んでいた。

よあけのばんに。

つるとかめがすべった。

そう言えば、この歌って、どんな意味があるんだろう？

『この歌は、呪い歌だよ』
え？

『これは、呪いの歌なんだ。だから、歌った者には、呪いがかかるんだ』

クスクスクス。

楽しげに響く、トーンの高い子供の声には、何処か聞き覚えがある気がした。

誰？

あなたは誰なの？

クスクスクス。

答えは無い。

ただ暗闇に、楽しげな子供達の歌声と、その笑い声だけが響いていた。

「はあっ」

車の助手席で、大きな溜息を付いた私は、右手の指先で眉根をのみほぐした。

お盆の帰省ラッシュの渋滞で、流れの止まった高速道路。何処までも続く車の群は、まるで蟻の大群を思わせる。

じりじりと容赦なく照りつける真夏の太陽がアスファルトを焼き付け、まるで履気楼のように全てをユラユラと揺らしていた。ただでさえ、ピタリとも動かない車にイライラするのに、昨夜の夢見の悪さが自分で思っているよりかなり体調に響いていた。

疲れている。仕事のストレスと昨夜の訳の分からない、夢。ダブル攻撃だ。

「どうした香織^{かおり}？ 溜息なんかついて。腹でも空いたのか？」
運転席で、ハンドルを握る彼氏の東悟^{とうご}が、ふざけたセリフと一緒に心配気な視線を投げてくる。

父親が宮司になったため、神社の跡取り息子に昇格した東悟とは、私が高校生二年の夏から恋人同士になって、もう八年が経つ。今では、お互い良いところも悪いところも知り尽くして、気心の知れた心地よい関係を築いていた。

東悟は建築関係の仕事がしたいとその方面の大学に進み、今は東京の建設会社に就職してしまい、実家の神社を存亡の危機に陥れている。まあでも、そのお陰で同じ東京の空の下で、愛を育んでくれた訳だけど。

「何で私が元気がないと、お腹が空いてると思うのよ？」

反撃してやろうと口を開きかけたが、昨夜の夢を思い出して気がそがれ、「そんなんじゃない……」と、言葉を濁した。

悪夢と言う訳ではないが、気持ちのいい話でもないから。

『呪い歌』

あの子供の声と言った言葉が、妙に心に引つ掛かった。

「ねえ、東悟」

東悟なら何か知っているだろうか？ 一応、神社の跡取り息子だし。

「なに？」

「あのさ、子供のころよく『かごめかごめ』ってやったじゃない？」「え？」

いきなり振られた話題が、思いがけなかったのだろう、東悟は、きよとんと目を丸くした。そうすると、普段はクールぶっている醬油顔が可愛く見えるから可笑しい。

「かごめかごめって、輪になってグルグル回る、あれか？」

「うん、そう。それ」

「それが、どうかしたのか？」

まさか、あれが呪いの歌なのか？ とは聞けないので、私は遠回しに言葉を選んだ。

「あの歌の歌詞って、何だか不思議だよね？ 東悟、意味知ってる？」

「意味？ うーん……、知らないな？ 歌がどうかしたのか？」

東悟は視線を前方に向けたまま、眉間にシワをよせた。遠くを見詰める瞳がずっと細められる。でもすぐ、諦めたように肩をすくめた。

やっぱり、東悟は知らないか。

「ううん、別に良いの。ちょっと気になっただけだから」

「ふうん」

まあ、自分も似たようなものだから、文句は言えない。沙希ならこう言っの詳しいんだけど。

私は、親友の細面の和風美人顔を思い浮かべた。

地黒で猫っ毛の私とは違って、抜けるような白い肌に大きな黒目

がちの瞳。

さらさらストレートの長い髪は、女の私から見てもとても綺麗で、まるで『かぐや姫』のようだと思う。またその美しさが鼻につかないのは、ひとえにその性格の良さ故だ。

私にとっては、大切な幼馴染みでなんでも話せる一番の親友だった。

「沙希ちゃんなら、知っていきそうだよな。そう言うの妙に詳しくかったもんな」

「私も今、沙希に聞こうかと思ったのよ」

同じ事を考えるなんて、一緒に居る時間が長いと、思考回路まで似てくるんだらうか？

私は、少し嬉しくなった。

「一昨日先に帰ってるはずだから、着いたら電話してみようかな」ピロロン、ピロロン。

とその時、不意にメールの着信音が鳴った。

バックから携帯電話を取り出して、差出人を確認する。

差出人は『新庄沙希』

沙希からのメールだ。

「噂をすれば、沙希からメールだよ。噂をしているのが分かったのかな？」

クスクスと笑いながら、私はメールボックスを開いた。

☐ 2007/8/13

13:20

送信者・新庄沙希

タイトル・なし

本文・かごめかごめ』

かごめかごめ

え？

「なに、これ？」

意味もなく、声の上擦った。本文に書かれている『かごめかごめ』という文字。意味不明だ。

もしかして、『かごめかごめ』と、書きたかったんだらうか？

どちらにしても意味が分からないのは同じだ。それに、私が見た夢との奇妙な符合。偶然だらうか？

「どうした？ 沙希ちゃん何だつて？」

「うん、何だか途中で、送信しちゃったみたいで、意味不明なの」

「なんだそれ？ 沙希ちゃんにしては珍しいな。香織なら、やりそうだけど」

含み笑う東悟を一睨みして「どうせ私はおつちよこちよいですよーだ！」と舌を出す。

それにしても、冷静沈着を絵に描いたような沙希には珍しいドジだ。

腑に落ちなかったが、どうせ家に帰ればご近所さんなのだから、『着いてから直接聞けばいいや』そう思ってそのままにしまった。

そして、それから二時間後。私は家に着くなり、衝撃の事実を知ることになったのだ。

「えー!? 今、なんて言ったの、お母さん!?!」

家の玄関でいきなり聞かされた母の話に、私は頭の中が真っ白になった。信じられない。

「一昨日帰って来るなり、自分の部屋に荷物を置いて、ふらりと出て行ったつきり戻らないそうなのよ。警察には捜索願いを出したらしいんだけど、まだ見付からないって……」

沙希の事だ。沙希が、一昨日から行方不明だと言うのだ。

「そんな、ばかな……。だって、今日私、沙希からメールを貰ったよ?」

私はジープンの後ろポケットに突っ込んであった携帯電話を取り出し、震える指先でメールボックスを開いた。

が。

「えー!? な……。んで? 確かにメールが、来たのに……」

私は信じられない思いで、メールの着信記録を探した。端から端まで隈無くスクロールして何度も確認する。

でも、見付からない。

確かに来ていたはずの沙希からのメールが無かった。

私は、慌てて沙希のケータイに電話を掛けた。

ぶるる。

ぶるる。

出ない。呼び出しはしているのに、沙希は出ない

呼び出しはしている!?!

「携帯! 携帯が繋がるんなら、警察で電波を追えるんじゃない!」

私の質問に、母は哀しそうに目を伏せた。

「携帯電話は、荷物と一緒に家に置いてあったんですって」

「そんな……」

なら、電話など掛けたところで意味がない。

私はがっくりと肩の力が抜けてしまい、ため息をつきながら携帯電話を切った。KBR<

携帯電話を持たないで出ていったと言うことは、沙希に遠くに行くつもりはなかったと言うことだろうか？

「妹の早苗ちゃんもまだ見付からないのに、姉妹二人揃ってなんて新庄さんお気の毒に」

ため息混じりに呟く母の瞳には、同じ娘を持つ母親としての同情と共感が色濃く表れていた。そう。

沙希の妹の早苗ちゃんは十三年前、六才の時、行方不明になっていて未だに見付かっていない。当時は『神隠し』だとテレビや新聞でもさんざん騒がれたものだ。

それが今度は、沙希まで。

沙希に良く面差しの似た、沙希のお母さんの線の細い哀しげな面影が浮かんだ。

「お母さん、私、沙希の家に行つて来る！」

私のセリフに、母は驚いたように目を丸くした。

「香織！ よしなさい！ 新庄さんんちは」

「行つて来るよ！」

何もしないで鬱々と待っているなんて性に合わない。

こういうときは、行動有るのみだ。

母の制止を振り切った私は、玄関に荷物を置いたま飛び出した。

徒歩で十分。

走れば5分も有れば着くだろう沙希の家に向かって、私は一目散に駆け出した。

「な……に、これ？」

上がる息の下、私はやっと声を絞り出した。

むつとする刺激臭が、あたり一面に漂っている。

沙希の家の前。目に飛び込んできた光景に、私は思わずその場で棒立ちになってしまった。そこに有るはずの沙希の実家が無かった。

いや、あるにはあるのだが、それは最早家とは言えないだろう。やけ崩れて、黒い燃えかすとなった家の残骸が積み重なっている。

私は、敷地の中に視線を巡らせた。

見覚えのある植木、庭石、倉庫。そして、手入れの行き届いた美しい花壇。その花壇の中で、大輪の向日葵が、夏の日差しを浴びて咲き誇っている。その向日葵の間を、何かがチラチラ動いているのが見えた。

黄色い、麦わら帽子。赤いリボンが風に吹かれて、向日葵の葉と一緒にユラユラ揺れている。白いワンピースの……女の子？

クスクス。

え？

その笑い声に、聞き覚えがあった。

夢だ。夢の中の子供の笑い声。

「香織！」

「きやつ!？」

不意に背後から声を掛けられ、私は文字通り飛び上がった。慌てて後を振り返ると、私と同じに驚いた顔をしている東悟が立っていた。

「脅かすなよ香織。びっくりするじゃん」

「それは、こつちのセリフだよ。心臓が止まるかと思ったじゃない、もうっ！」

安堵感が軽い怒りに変わり、思わずバチンと東悟の胸を叩いた。

「悪い悪い。家に着くなり、沙希ちゃんの事を聞いて驚いて飛んで来たんだ。お前もか？」

「うん。そうなんだけど……。これ、どういう事？ 火事になったの？」

「ああ。昨夜、失火だそうだ」
失火？

沙希の失踪と何か関係があるのだろうか。

「おじさんや、おばさんは!?!」
まさか。

「心配ない。二人とも無事だつてさ。ただ……」

口ごもる東悟のセリフに、嫌な予感が胸を掠める。

「ただ？」

「ショックで、おばさんが入院してるらしい」

「おばさんが……」

無理もない。

唯一残った娘の失踪と、家の火事。ショックを受けない方がどうかしている。

それにしても沙希。

実家の一大事に、あなたは何処にいるの？
クスクスクス。

心の中で逡巡する私の耳に、また子供の笑い声が聞こえて、慌てて花壇に目をやった。

「どうした香織？」

「声……がした」

「声って？ 誰の声？」

聞こえていないのか、東悟は訝しげに眉をひそめている。

私は声の主の姿を見つけようと、一心不乱に花壇の中に目を凝らした。

でも。

ユラリ、ユラリ。

そこには、風に吹かれてユラユラと揺れている向日葵の姿があるだけだった。

四

陽も傾きかけた夕方。

私と東悟は、『おばさん』こと沙希のお母さんのお見舞いに病院を訪れていた。

遠くに聞こえるヒグラシの忙しない鳴き声が、どこかもの悲しく響いてくる。

町の小さな個人病院は、お盆休みなためか閑散としていて、それが余計に私の気持ちを重くした。

「香織ちゃん……」

私の姿を見るなり、おばさんは、そう言って声を詰まらせた。

簡素な白いパイプベットの上に横たわるその姿は、私の記憶の中のイメージよりも大分やつれていた。

元々太っている人ではないけど、今は痩せすぎている。

シワと白髪が増え憔悴しきったその姿は、見ているのが辛かった。

「おばさん……」

私もそれ以上、言葉を続ける事が出来ない。

「沙希が、帰って来ないの。早苗と同じに、帰って来ないのよ」

おばさんの硬く握られた筋張った手の甲に、涙の滴が一つ二つとしたり落ちる。

声を殺してむせび泣くその姿に、私は掛けるべき言葉が見付からなかった。

でも、聞かなければ。

私は意を決して、口を開いた。

「おばさん、沙希の携帯電話は何処にあるんですか？」

沙希の携帯電話のメールの送受信データ。

多分、そこに何か答えがある。

私は、そう確信していた。

沙希の失踪は、警察では事件としては扱われておらず、沙希の携帯電話もおばさんが所持していた。許可を得て、メールボックスを調べてみたが結局、私にメールを送った記録は残されてなかった。着信も送信も、記録が残らないメール。あれは、幻だったとも言っのたろうか？

沙希は一昨日の夕方家に帰るなり『神社に行く』と言い残し、ふらりと出て行ったのだと言う。

辺りはもう黄昏から夕闇へと変わりつつある。青々と茂る田んぼの稲穂は、夕日を受けて朱色に染まっていた。

その中央に走る、広い真っ直ぐな農道を夕日を目がけて走り抜けていく。

ゆっくりと流れていく、夕日を受けて全てが赤く染まる風景を車の窓越しに見詰めながら、私はためらいがちに口を開いた。

「神社って言ったなら、東悟のそこだよな？」

「うん……。多分そうだろうな」

何か、考え込むように目を細めて前方を見詰めたまま、東悟がボソリと呟き相づちを打つ。

神社に何があったのだろうか？

峰岸神社は、地元でも大きな神社で敷地もかなり広い。

ただでさえ田舎で人家がまばらな土地柄。

神社の周りは、更に人家が少ない……というか皆無だ。

おそらくは、目撃者を捜すのは容易なことでは無いだろうと、素人の私でもそう思う。

じゃあ、どうすればいい？

ピロロン、ピロロン。

考えに沈んでいた私は、不意に響いたメールの着信音に驚いて、思わず飛び上がりそうになった。

私の携帯だ。チラリと東悟と視線を合わせる。

ある予感に、胸の鼓動が跳ね上がる。
私はジーンズのポケットから携帯を取り出し、メールボックスを開いた。

『2007/8/13

19:14

送信者・新庄沙希

タイトル・なし

本文

『かごめかごめ

かこのなかのとりは

いついつでやる

よあけのばんに

つるとかめがすべった

うしろのしょうめんだあれ?』

その文面を見た瞬間、ゾクリと背筋を何か冷たいものが通り抜けた。
やはりそうか。

最初の意味不明のメールの内容は、これと同じ物だ。

根拠があるわけじゃない。でも、私はそう確信した。

「なんだ? どうしたんだ?」

「かごめ、かごめ……」

「え?」

私の異変を察知した東悟が車を路肩に止め、がちがちに握りしめていた携帯を私の手から外して、その画面に目を走らせた。そして小さく息を呑む。

「かごめかごめの……歌?」

眉根をギョッと寄せる東悟の表情は、いつになく険しい。

「まさか、今日沙希ちゃんからあったメールの内容って、これと同じだったのか？」

東悟の問いに、私はゆっくりと頷いた。

「うん。あの時は『かごめかごめ』だけしか書かれていなかったけど、多分同じだと思う」

「かごめかごめ……」

呟く東悟の声が、狭い車内に虚ろに響いた。

神社に着いた頃は、すっかり辺りは夜のとばりに包まれていた。

闇の中、ぼつかりと浮かんだ青白い満月。

その月明かりの下、照らされ浮かび上がる神社のお社は、荘厳と言ふよりは恐怖の念を抱かせる。その内に潜む何か得体の知れない力を感じて、私はぶるつと身震いをした。

足下を照らすのは、頼りない懐中電灯の明かりだけだ。心細いとこの上ない。

「やはり、沙希ちゃんが来た痕跡は見付からないな」

「うん……」

東悟と二人で神社の敷地をぐるりと回ってみたが、沙希がここに来たと言ふ証拠は何処にも見い出せなかった。

「沙希……」

無駄とは知りつつも私は友人の姿を求め、ゆっくり神社の境内を見回した。手入れされた植木の向こうは、鬱蒼とした自然の山が深い闇を懐に抱いて静かに佇んでいる。

沙希、あなた一体、何処にいるの？

答える者は無く、ただ静寂だけが世界を支配していた。

私はゆっくり神社の境内を見回した。

手入れされた植木の向こうは、鬱蒼とした自然の山が深い闇を懐に抱いて静かに佇んでいる。その森の中で、ちらりと何か動いた気がした。

いや、確かに黒い木々の間、何か白いものが動いている。

「どうした？」

「あれ、何？」

あまり目が良くない私には、今一つ良く判別が出来ない。

「え？」

東悟が私の指さす先に視線を向けた次の瞬間、息を飲む音が聞こえた。

「家に戻るぞ」

「え？」

「いいから、家に行こう」

東悟は声を殺してそう囁くと、私の手をがっちり掴んだ。

思いも寄らない強い力に、小さな悲鳴が口を突いて出る。

東悟はそのまま驚くくらいの強引さで、ぐいぐい私を引っ張っていく。

目的地は、お社から十メートルほど離れた東悟の自宅だ。

ついさつき家まで送ってくれと言ったばかりなのに、その舌の根が乾かないうちに今度は自宅に行くという。

有無を言わせぬ東悟の行動が、私の不安を駆り立てた。

「ちょ、ちょっとどうしたの!？」

「こんなの、ぜんぜん東悟らしくない。」

「駄目だ、間に合わない!」

私の質問など眼中にないように、東悟そう吐き捨てるように言い放ち、くるりときびすを返した。

今度は、すぐ近くにある神社の本殿に向かって私を引っ張っていく。

「と、東悟！？ どうしたのよ!？」

ぐるぐる振り回される形になった私は、バランスを崩して前につんのめりそうになった。

それでも東悟の歩く速度は弱まるどころか、いつそう早くなっていく。

東悟は無言のまま険しい表情で、私の右手をがっちり掴んだまま本殿の木の階段を駆け上がり、木戸を勢いよく引いた。

中には明かりなど無いから真っ暗だ。一瞬、その闇の濃さに足が竦んで、私は立ち止まった。

『香織……』

躊躇う私の耳に、確かに自分を呼ぶ女の声が聞こえた。

「え?」

沙希?

小さくか細い声。でも確かにその声は、沙希の声だ。

「香織!」

振り返ろうとした私は、東悟に凄い力で本殿の中に引き込まれた。余りの勢いにそのまま床に倒れ込んでしまう。

「痛っ、なにすんのよ、東悟!」

勢いよく転がり込んだせいで強か^{したた}打ち付けた肘の痛みを堪えながら、文句を言う私の目前で、東悟が入り口の引き戸を必死で閉めようとしていた。でも何故かあと十五センチと言う所で、戸は閉まり切らずに止まっている。

「と、東悟……?」

どうしたの? と言おうとして、私は凍り付いた。

暗い建物の中から見ると外は、月の光で明るい。はずなのに、そこは漆黒の闇に包まれていた。その闇の中から細長い白い腕が、戸の内側に、ひよろりと張り付くように伸びている。

力など入れていないように、ただそこに伸びている腕。その白い

腕が、戸を閉めようとしている東悟の渾身の力を止めているのだ。

な、何？ なんなのこれは！？

私は、何の言葉も発することが出来ずに、ただその光景に見入っていた。

「香織！ 手を貸せっ！」

座り込んだまま身動きも出来ずにいる私に、東悟の櫂げきが飛んできた。私はハッと我に返り急いで立ち上がると、東悟の後に周り込んで扉に手を添えた。そして渾身の力を込めて戸を押しした。

じり、じり、じり。

少しずつ、確実に閉まって行く戸。

ガタン！

それが完全に閉まった瞬間、白い腕は跡形もなくすうっと消えてしまった。

戸を閉めてしまったため、本殿の中は真っ暗だ。ただ、二人の荒い息使だけが響いている。はあはあと肩で息を付きながら、やはり同じように息の上がっている東悟に向かいやっとの事で質問をする。

「な、何なの、あれは？」

「……」

「東悟？」

答える素振りの無い徹の様子に不安になって、暗闇の中、手探りで東悟の腕にしがみつく。その手に伝わる微かな振動に、私はギクリとした。

震えている。

滅多な事では動じない東悟が、震えている。

「香織……」

何か言わずらそうに口ごもる東悟の腕を辿り、手を繋ぐ。その手はヒンヤリと冷たく、やはり微かに震えていた。

「沙希ちゃんは、もう多分、生きてはいないと思う」

「……」

『なにバカな事言ってるのよ!』

いつもの私なら、そう言っているだろう。でも、私には、東悟の言葉が真実だと分かってしまった。あの白い細い腕、その手首の内側にある二つならんだ小さな黒子ほくろ、あれは確かに沙希のものだ。

あの白い手が、生きている人間のものであるはずがない。

ならば、その手の主は。

クスクスクス。

不意に背後で楽しげな笑い声が上がって、私達は二人同時に振り返った。

建物の中央付近に、白い人影が立っていた

光源など無いはずなのに、その少女の姿だけがスポットライトを当てたように浮かび上がっている。

風など無いのに、ユラユラと揺れている黄色い麦わら帽子の赤いリボン。

白いノースリーブのワンピースを着た少女が、楽しげな笑みを浮かべて、手を後ろに組んで立っていた。

「香織ちゃん、東悟君、私に分からないの?」

クスクス。

少女が、屈託無く笑う。

抜けるような白い肌。

少女らしい、丸い頬のライン。

その白い頬の両側で、耳の後ろで二つに結んだ色素の薄い茶色の髪が、彼女が笑ったたびに軽やかに揺れている。

好奇心に富んだ、大きな黒目がちの瞳。

サクランボのような可憐な唇。

「ま……さか」

東悟が、呻くような声を絞り出す。

私も信じられない思いで、その少女の名を呼んだ。

「早苗……ちゃん? あなた、早苗ちゃんなの?」

新庄早苗。

幼い日。

私たちの後をいつも楽しそうに付いてきた、沙希の妹『早苗ちゃん』。

目の前の少女の顔は、記憶の中の彼女に良く似ていた。そんなはずがないと、理性では分かっている。

早苗ちゃんが六歳の時行方不明になってから、すでに十三年の月日が流れているのだ。今、生きていれば、早苗ちゃんは十九歳のはずだ。どう見積もっても、この少女は十歳を超えているようには見えない。

生きて……いれば？

私は、彼女の死を無意識のうちに肯定している自分の思考に慄然とした。

少女はそんな私の心を読んだかのように、邪気の無い笑顔のまま恐ろしい話しを始めた。

『そうよ、私は早苗。十三年前、殺されて埋められちゃった、可哀相な早苗ちゃん』

「え？」

殺された！？

「香織、相手にするんじゃない！」

鋭く言い放った東悟に、私は腕を掴まれ強く引かれた。

「東悟っ？」

抗う間もなく、そのまま抱きすくめられる。

上背のある東悟に抱え込まれてしまうと、私にはもう何も見えな

い。

「東悟っ！」

「あれは、生きている人間じゃない。相手にしては駄目だ！」

「で、でもっ」

冷たいのね、東悟君。

頭の中に直接響いてきた声。それは、沙希の声だった。

「沙希！？ 沙希なの！？ 東悟、放して、沙希が来てる、沙希が

来てるのよ!」

一瞬、緩んだ東悟の腕を振りほどいて、私は、辺りを見渡した。
「ここよ」

すぐ耳元で声がして、ギクリと振り返る。

目の前。

私の目の前に、沙希が立っていた。

いつもと変わらない、サラサラの癖のないストレートな黒髪。
卵形の綺麗な顔の輪郭。スツとして理知的な瞳。形の良い唇が、ニ
コリと微笑んでいる。

「沙希? なんだ、ビックリさせないでよ。行方不明だなんて、
心配したじゃないのっ」

安堵感で、鼻の奥に熱いモノがツンとこみ上げる。

「東悟なんて、沙希が死んだみたいだな事言うのよ! 酷いでしょ?」
沙希は答えない。

ただ、哀しげな眼差しで、見ている。

私ではなく、東悟を。

六

「な、んで？ そんなバカな……」

東悟が、目に見えて狼狽していた。

沙希を、信じられないモノを見たと言つのように、驚きの眼で凝視している。

それは、私が見たことが無いほど恐ろしい表情だ。

「東……悟？」

沙希が戻ってきたのに、どうしてそんな怖い顔をするの？

喜んでくれないの？

そう言おうと口を開きかけたとき、沙希の白い腕がすうっと上がった。

真つ直ぐ東悟を指さしている。

今まで穏やかだった表情が一変した。

上目遣いに東悟をにらみつける黒い瞳に、今までに見たことがないような厳しい光が宿る。

香織。

紡ぎ出された私を呼ぶ声も、固い意志を秘めたように厳しい。

その厳しさに、心の奥がざわついた。

私は、殺されたの。

その人、峰岸東悟に。

「え？」

「やめろっ、香織、耳を貸すんじゃない！」

何？

何を言っているの？

訳が分からず混乱している私の脳裏に、一つの映像が浮かんだ。

かごめかごめ

かこのなかのとおりは
いついつでやる

夕闇に包まれた神社の境内で、小さな女の子が楽しげにはしゃいでいる。

黄色い麦わら帽子には、可愛い赤いリボン。ノースリーブの白いワンピース。

その傍らに立つ大柄な少年が、少女を神社の本殿に誘う。

「あそこには、楽しいものがあるんだよ。さあ、行こう」
そして少女は、それつきり姿を見せなくなった。

画面が切り替わる。

同じ薄闇のなか、神社の階段の上で、二つの影が言い合いをしている。

「子供が出来たの。香織と別れて、私と結婚して！」
髪を振り乱し、そう叫んでいるのは沙希だ。

「冗談じゃない。一度だけと言う約束だっただろう!? 俺は香織と別れるつもりはない！」

東悟が、にべもなく沙希の手を振り払う。

「いやよ! いやっ! 香織にばらしてやる。一切合切何もかもぶちまけてやる!」

「沙希!」

神社の急な階段の上。もみ合う二人。

「きゃああああああああつ!」
耳を劈く、沙希の悲鳴。

ナニ?

コレハ、ナンナノ?

『東悟よ。十三年前、東悟が早苗を殺したの』
ウソ。

『私と東悟は、付き合っていたのよ』

ウソヨ。

『私は東悟に殺されたの』

「香織、しつかりしろっ！」

バチンと言う音が耳に届いた瞬間、私の頬に猛烈な痛みが走った。

「香織、あれは、亡者だ。騙されるな、自分の信じるモノを信じる
！」

自分の信じるモノ？

私が信じるモノって何？

東悟は、早苗ちゃんを殺したの？

東悟は、沙希を殺したの？

「香織！」

不意に、強い力で抱きすくめられて、ハッと我に返る。

トクン。トクン。

力強く脈打つ東悟の鼓動が、Tシャツ越しに伝わってくる。ふわ

つと馴染んだタバコと東悟の匂いが鼻腔をくすぐる。

『香織……、東悟が殺したのよ』

尚も、耳に届く沙希の声。

私は、ゆっくり目を閉じて、自分の心に問うた。

私が信じるのは、誰？

沙希は、

新庄沙希という人間は、親友を裏切れるような人間じゃない。そ

れは、物心付いてからいつも一緒にいた私が、一番良く知っている。

「あなたは、沙希じゃない。沙希は私を裏切ったりしない」

脳に直に伝わるリアルな沙希のビジョンを振り払うように、私は

静かに口を開いた。

『何を言っているの？ ほら、私は沙希よ』

「あなたは、沙希じゃない」

真っ直ぐ前を見据えて言い放つ。

「だから来ないで。何処かに消えてっ！」
次の瞬間、私の叫び声と重なるように、大きな破裂音が響き渡った。

「香織、おい香織！ しっかりしろ。惑わされるな！」

東悟の声で現実を引き戻された私は、今体験したことが、心の中の出来事だったことを知った。

周りは、深い闇。

私は、東悟に抱きしめられたままの状態で、闇に閉ざされた本殿の中で佇んでいた。

「東……悟」

まるで静電気を帯びたように、ピリピリと空気が震えている。背筋を、ゾクゾクと悪寒が駆け抜た。

私は、本殿の中に満ちて行く、凶悪で禍々しい気配に思わず言葉を無くした。

そして、目の前に現れた白い腕に息を呑む。

文字通り、突然現れたその腕は、それ自体がほの白く光を放っていた。

その腕が、すうつと私を抱く東悟の首に向かって伸びていく。

その意図は、分かりすぎるくらい明白だった。

そん……な。

私は、これから起こることを想像して、背筋が凍った。ダメ。

細い、しなやかな指先が東悟の首に近付いていく。

指先が東悟の首に触れたと思った途端、音もなく締め上げ始めた。白い指先が、東悟の喉に食い込んでいく。

「うぐっ……」

私を抱えたまま、苦悶の表情を浮かべた東悟は、ただ苦しげな呻き声を上げた。

「やめて！ なんで！？ どうして東悟なの！？」

『ソイツが私を殺したからさ
クツクツクツ。』

忍び笑うその声は、沙希のものではなかった。
いや、もはや人間のものではすらない。

獣だ、獣の声。

「離れて！ 離れなさいっ！」

『死ネバイイ。男ハミンナ、死ネバイイ』

どうすれば良いの!?

どうすれば!?

あせつて周りを見渡す私の目に、闇にボオツと浮かび上がるお供え物の日本酒の一升瓶が目に入った。白い包装紙で包まれたその瓶は、しめ縄が掛けられている。

あれだ！

私は、硬直状態の東悟の腕から下にずり落ちると、日本酒の所まで床を這って行った。白い包装紙をはぎ取り、アルミのキャップを外し、栓を指でこじ開けようとした。

でも指が震えて、上手く外れない。

ええいつ！

私は観念して、頑丈なだけが取り柄の前歯を瓶と栓の間にこじ入れ、気合いととも引き抜いた。

スポーン！

場に不似合いな剽軽な音を響かせ、瓶の栓が抜ける。

私は、一升瓶を抱えて東悟の元に駆け寄った。

「消える、化けものっ！ 消えちゃえっ！！」

叫びながら東悟の首を絞める腕目がけて、一升瓶のお酒をドボドボとぶちまける。

ビシユウウツ。

まるで焼けた石を水に落としたときの、蒸気が吹き出るような異音が上がった。何かを焦がしたような、きな臭い匂いが辺りに充満する。

そして上がる、声。

人間のものとは思えない叫び声。

「やめてよお、香織ちゃん、くるしいよお」

早苗ちゃんがあどけない声で、苦しげにささやく。

「香織、やめて。タスケテ……」

沙希が、消え入りそうな声で、悲しげにささやく。

違う。

違う！

違うっ！！

辺りに漂うきついアルコール臭に、飲めない体質の私は、くらくらしてくる。

体が、泥のように重たかった。

だんだん、意識が遠くなる。

ああ、もうだめかも。

ごめんね、東悟。

薄れ行く意識の下で私は、かごめかごめの歌を聞いたような気がした。

「ねえ、香織」

「なあに、沙希。どうしたの？」

『今年のお盆休みは有給を纏めて取ったから、先に一人で帰郷する』
と言う沙希は、出立間際、会社にいる私に電話をかけてきた。

「東悟君と、いつ結婚するの？」

「ええっ！？」

なにを、藪から棒に。

いきなり切り出されたセリフに驚いた私は、素っ頓狂な声を上げてしまった。危うく携帯電話を落っこしそうになる。

いくら人気の無い給湯室でも、うるさい課長にでも聞きとがめられたらやっかいだ。

私は周りに人が居ないのを素早く確認して、声のトーンを落とすと早口に囁いた。

「そんなの東悟に聞いてよ！ 私一人じゃ結婚できないんだからっ。課長が来たらヤバイからもう切るね」

くすくすくす。

「分かったわ。そうする」

電話から聞こえる沙希の声は、楽しそうだった。

「じゃ、また向こうでね！ みんなでバーベキューでもしよう」

「そうだね」

何気なく思いつきで言った私の提案に答える声に、暗さなんて微塵も感じられなかった。

沙希。

沙希。

何処よ。

何処にいるの？

聞きたいことがあるの。

ほら、『かごめかごめ』の歌。

あれってどんな意味があるの？

沙希なら知ってるでしょ？

ねえ、沙希。

教えて。

教えてよ。

お願いだから、帰ってきて。

かごめかごめ

了

私が目を覚ましたのは、翌々日の午後三時。

東悟の家の客間だった。

十二畳の和室の布団に、私は寝かされていた。

「頭がガンガンするー」と言う私に、頭痛薬と何故かあんパンを一つ渡し「寝過ぎだよ」と眉を寄せた東悟の表情は、哀しげだったけど、どこかスッキリして見えた。

沙希は、あの夜、私が見えろと言って指さした山の中で、服毒自殺している姿で発見された。

亡推定時刻は、神社へ行くと家を出てすぐだった。

私が最初のメールを受け取った時、沙希は既にこの世には居なかったのだ。

残された遺書には十三年前、妹の早苗ちゃんを些細な喧嘩から誤って死なせてしまい、庭の花壇に埋めたこと。

最近、既婚者の男性との間に子供を身籠もり、流産の末その男性にも捨てられてしまい自殺に至ったことが記されていた。

早苗ちゃんは、遺書の示す新庄家の花壇の下から、白骨体として発見された。

ただ、いくら幼い少女だとはいえ、その遺体を当時12歳だった沙希一人で埋めたとは考えにくいことから、家族が取り調べを受けている。

あの向日葵。

見事な大輪の向日葵は、

早苗ちゃんの亡骸を苗床にして、咲き誇っていたのだ。

かごめかごめ

東悟は、『かごめかごめ』の歌の言い伝えを教えてくれた。

あまり良い話しではないので、私が聞いた時あえて言わなかったのだそうだ。

「かごめかごめの歌の意味には諸説あるが、どれもみな余り良い意味じゃないんだ……」

東悟の話によれば、かごめは『籠女』で、遊女を表すとか、妊娠している母親を表す言葉だとも伝えられているのだと言う。

『籠の中のとり』は『母親の胎内の子供』

『つるとかめがすべった』は流産を指している。

何種類か聞いた中の一つの説が、心の奥に深く突き刺さった。

きつと私は今後、この歌を自らが口ずさむ事は決してないだろう。

でもきつと、忘れない。

忘れられない。

それは、悲しい確信。

東悟の話聞き終えた私は、あんパンを一かじりして顆粒の頭痛薬を水で流し込み、傍らで胡座をかいて私の様子を眺めている東悟の顔を覗き込んだ。

「ねえ、東悟？」

「何？」

「あの時、あそこに現れたのは、沙希だったのかな？」

沙希の姿をしたあの霊。

私はあのとき、沙希じゃないと否定した。

でもそれは、私がそう思ったかっただけで、本当は間違いなく沙希だったのかも知れない。

今になって、そんな考えが頭をよぎる。

もしも、あの霊が沙希なら……。

私は沙希に憎まれていたことになる。

親友だと思っていたのは、私だけだったのかも。

そもそも、沙希が不倫に悩んでいたなんて、私は露ほども知らなかった。

ましてや、早苗ちゃんの事は未だに信じられない。
私は、一番近くにいなながら沙希の事を何も知らない。
うっん。

知ろうとしなかった。

それだけでも十分、友人失格だ。

「違うよ」

「え？」

妙にきっぱり断言する東悟の返事に、私は思わず間の抜けた声を上げてしまった。

「言っただろう。あれは亡者だって。沙希ちゃんの無念の思いにつけ込んだタチの悪い悪霊だ。沙希ちゃんは、お前を陥れるような人間とは違うだろう？」

ん？ と東悟が私の顔を覗き込む。

そうなら、嬉しいんだけど。

「なあ、香織」

「うん？」

「こんな時に、なんだけど」

そう言っつて、ニカツと笑みを浮かべる東悟の瞳に、ちよつと悪戯小僧のような少年めいた光が揺れる。

「うん」

「俺は、お前に惚れ直したぜ！」

つて東悟は、私をギュウギュウ抱きしめて、熱いキスをくれた。

のは良いんだけど、あんパンと頭痛薬のミックス味がしたの
だろう、『うげえ』と言う顔をして、『水、水』と言いながら走っ
て部屋を出て行ってしまった。

ばかね。

「思わず口の端が上がる。」

沙希が死んだって言うのに、それでも笑える自分に感心してしま

う。

私は案外、自分が思っているより冷たい人間なのかもしれない。
沙希。

あのメールは、きつとあなただね？

私に危険を知らせてくれたんだよね？

答えは無い。

ただ、東悟が閉め忘れた襖の間から、少し秋の気配の混じった乾いた空気が流れ込み、私の頬を優しく撫でて行った。

かごめかごめ、かごのなかのとおりいは

その風に乗ってどこからか、子供達の楽しい歌声が聞こえてくる。

遠くで、夏を惜しむかのようなヒグラシの鳴き声が、何処かもの悲しく響いていた。

了

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4990c/>

かごめかごめ

2009年5月29日15時15分発行